

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21年4月28日現在

研究種目：基盤研究（B）（一般）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18320004
 研究課題名（和文） 倫理・法・自由 ヘレニズム・ヘブライズム思潮の相克と止揚をめぐる比較研究
 研究課題名（英文） Ethics・Law・Freedom Comparative study about the conflict and integration between Hellenism and Hebraism
 研究代表者
 関根清三（SEKINE SEIZO）
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
 90179341

研究成果の概要：

本研究は、倫理・法・自由、三者の関係の問い直しを目標として、現代の、個人の自由な選択とその制限としての倫理的規範、法的強制の葛藤の問題について解明することを主題とした。

具体的には、古代ギリシア・ヘブライ思想における倫理、法、自由の問題の再検討を通じて、ヘレニズム・ヘブライズムという西洋思想史の二大潮流の相克とその止揚の歴史の一断面を切り取り、加えて現代倫理学（ドイツ観念論以降の倫理学的展開）との批判的対質のために、近代のアトミズム的人間観・世界観における倫理・法・自由の関係の問い直しを平行して行った。

各年度毎に、研究代表者は古代ヘブライ倫理思想における「法と倫理」理解を検討し、研究分担者が、それぞれ 古代ギリシア倫理思想における「倫理・法・自由」、及びヘーゲル弁証法哲学に於ける近代世界観上の「倫理・法・自由」の関係について検討し、当該テキストのより深い読解と各時代固有の倫理思想の洗い直しを行って、先行研究と対質しつつ検討した。

ヘブライ思想関係図書、古代ギリシア関係図書、ヘーゲル法哲学関連図書のほか、現代の自由論にかかわる倫理学関連図書、及び法論に関わる社会科学関連図書についての整備に務め、本計画研究に必要な研究資料、及び情報交換すべき研究者たちを国内外に求めて共同研究ネットワークを構築するべく、積極的に内外の学会、研究機関に出張し、社会的国際的責任を果たすことに努めた。

また、ドイツより、古代ギリシア史・精神史の専門家ユルゲン・シュテルンベルク教授を招聘し、講演会（3月17日/青山学院大学）研究会（3月19日/京都大学、3月21日/青山学院大学）を開催した。

それらを踏まえ、ヘレニズム・ヘブライズム思潮の相克と止揚をめぐる総合的な比較研究により得られた視点から、現代倫理学における「倫理・法・自由」の問題について問い直す研究成果を世に問う準備を進めている。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総計	5,900,000	1,770,000	7,670,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学 (2801)

キーワード：(細目表キーワード：西洋倫理学) 倫理、法、自由、ギリシア、ヘブライ

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の主要目的である、**倫理・法・自由、三者の関係**の問い直しを巡っては、『クリトン』篇でのソクラテスの問いかけを嚆矢として、現代倫理学にあってなお、個人の自由な選好と、その制限としての倫理的規範ないしは法的強制の葛藤の問題として、J・ロールズの自由主義、R・ノージックの自由至上主義等の研究がある一方、片や共同体主義自由主義の観点からそれを批判するA・マッキンタイヤーの倫理学があり、更にその双方に批判的な加藤尚武氏の一連の研究や、「正義への企て」として法哲学を構想しなおす井上達夫氏の研究などがある。

ギリシア・ヘブライ思想に遡ってこの問題の捉え直しを図る本研究の直接の先行研究としては、半世紀以上前のヘッセン(1939)やボーマン(1954)等によるギリシア・ヘブライの比較研究があったが、その後は研究の専門分化もあり、両者の総合研究は、研究代表者関根の *A Comparative Study of the Origins of Ethical Thought: Hellenism and Hebraism* (2005) 以外にない。

関根は、上掲書のほか『旧約における超越と象徴』(東大出版会 1994)、『倫理の探索 - 聖書とその周辺から - 』(中央公論新社、2002年)『倫理思想の源流 ギリシアとヘブライの場合』(放送大学出版局 改訂版、2005)等の著書を通じ、ヘブライズムにおける律法の意義を読み解き、併せてギリシア思想における理性的実践哲学の解明にも遡って、人間の行為にまつわる正義、法、規範、超越の意味を問い直し続けている。またその考察に基づき、現代倫理学の諸問題についても積極的

に発言して来た。

研究協力者三嶋は、『規範と意味 - ソクラテスと現代』(東海大学出版会)『汝自身を知れ - 古代ギリシアの知恵と人間理解』等において古代ギリシアに於けるノモスとピュシスの関係を始めとする規範の根拠付けの問題を追究し、また、ニーチェ、マッキー等によって提起された規範と意味をめぐる近現代の問題系についても論じている。

下城は論文「力と悟性 - ヘーゲル「力」概念批判の射程」(『倫理学年報』45集)以来、カントに代表される個人主義的な近代哲学・倫理学の構図を巡り、その世界観的前提(機械論的力学的世界観、法則観)に遡ってヘーゲルの批判に依拠して研究を進めている。(2) 研究代表者は、本研究の基礎的研究として、(97年度科研費研究、基盤研究B)「古典研究の再構築 文化横断的な解析・総合方法の開発による」では、古典学の横断的研究を行なう構想を練り、次いで(98年度、特定領域研究A)「古典学の再構築 20世紀後半の研究成果総括と文化横断的研究による将来的展望」では、翌年からの総括班研究のために、各研究項目と研究分野の連絡・調整を行う一方、ドイツ・オーストリアに出張し、欧米の大学とのネットワークの基礎を築き、シンポジウム(京大)では、イスラエル学の現状と課題について報告。また本文批評から解釈に至る、古典学各分野の理論と実際について討議した。

(1999~2002年度、特定領域研究A(2))
「古典学の再構築 20世紀後半の研究成果総括と文化横断的研究による将来的展

望」では、A02 調整班「本文批評と解釈」代表と「イスラエル」分野責任者を兼ね、総括班で活動し、特に計画研究としては、プロジェクト「旧約聖書の本文批評と解釈

理論から翻訳まで」の代表者として、共同研究を重ねた。この計画研究の目的は、

古典テキストの読解に関する本文批評と伝承史、編集史、様式史、伝統史等々の理論と技法の実際について古典学の諸分野から学び、旧約聖書学に照らして整理反省すること。解釈の最終的課題を巡り、歴史的批判的方法におけるテキストの歴史的意味規定と、哲学的なその、解釈者の地平を考慮した思想的意味規定との、両者の望ましいバランスについての理論を、諸分野との共同研究の中で模索し、旧約解釈の場合に実際に適用すること。そうした解釈学的な吟味を踏まえ、翻訳に際しての訳語の統一、文脈での訳語の揺れの検討、過去の諸訳例との比較などを、コンピューターを駆使して遂行しつつ、具体的な翻訳の方法論と実践例を呈示すること、の3点である。

(2004~2005年度、基盤研究C)「他者と自由についての古代ヘブライ思想と古代ギリシア思想の比較研究」では上記諸研究に於ける方法論的準備を踏まえ、Th・ボーマンやA・J・ヘッセルとの対質を起点にヘブライ思想とギリシア思想との比較研究を行い、ヘブライ思想における超越としての「他者」との「驚き」に満ちた出会いの検討を行い、「驚き」を哲学の始まりとしたプラトンやアリストテレス等のギリシア思想との連関と相違点を浮き彫りにしつつ、個、共同体双方の救済論、自由の礎となっている古代ヘブライのその超越としての他者との出会いを、宗教的ドグマから解放し、哲学的解釈を行うことで、他者からの干渉の排除によって成立している近現代の権利としての自由に対し、他者と

の応答において成立する自由を対置した。

(3) 本研究の開始に先立って、研究代表者は、2001年9月、科研費シンポジウム(京都)にウィーン大学のペルトナー教授を、02年9月COEシンポジウム(東京)にはマールブルク大学のエレミヤス教授を招聘し、討論司会を務めた。また02年10月にはシンポジウム「旧約聖書と近代」(ハイデルベルク大)に招聘されて、フォン・ラートに至る近代の旧約解釈学の歴史について発表し討論した。2004年度夏学期は、ウィーン大学哲学科の客員教授として、倫理学・旧約学をめぐる講義と演習を務めた。

それらの成果は、

Transcendancy and Symbols in the Old Testament : A Genealogy of the Hermeneutical Experiences (BZAW 275, de Gruyter, 1999)、

『倫理想の源流 - ギリシアとヘブライの場合 - 』(放送大学教育振興会、2001年、改訂版、2005年)

『倫理の探索 - 聖書とその周辺から - 』(中央公論新社、2002年)

A Comparative Study of the Origins of Ethical Thought: Hellenism and Hebraism Rowman & Littlefield Publishers, 2005
という4冊の著書に纏められている。

2. 研究の目的

古代ギリシア・ヘブライ思想に遡っての倫理、法、自由の問題の再検討は、原理的にみれば、近代以降のアトミズムの人間観・世界観における同問題を世界観の問題ともども問い直す意味を有し、その立場から、現代倫理学の地平について、何某かの展望を開くことを目的とする。

具体的には、自然(法則)の自由な探求を出発点としたギリシアの理性哲学が、法・国家を対象とする実践哲学に変化していく経

緯を理論的に再検討する。ヘブライズムの驚きにみちた他者、神との出会い(愛の磁場)を起点にした人間の行為・歴史の倫理的意味の探求が、神の律法の下で行われたことの必然性を検討する。個人主義的な行為観・自由観・法則観を定礎したカント哲学を、そのアトミズムの本質から批判したヘーゲルの『法哲学』を考察し、価値認識が社会的・歴史的文脈に依存し、法的ないし超越的正義、倫理の理法、国家、神等に不可避に関わるとしたヘーゲルの論理について検討する。

以上を踏まえ、現代の、個人の自由をその尊厳と重ねて無制限とし、規制する法・倫理の最小限化を要求する個人主義的・自由主義的倫理学を、批判的に再検討するための基礎的地平を準備し、他者からの干渉を排除することによって成立している諸権利としての自由に対し、他者との応答において成立する自由の可能性を探る。

3. 研究の方法

1) 本研究は、研究代表者が古代ヘブライ倫理思想における「法と倫理」理解の検討を行い、研究分担者が、それぞれ古代ギリシア倫理思想における「倫理・法・自由」理解の検討、ヘーゲルのカント批判に於ける「倫理・法・自由」の理解の検討を分担した。

初年度平成 18 年度に各自が、それぞれの課題遂行に適切なテキストを選定し、先行研究の確認ならびに時代固有の倫理思想傾向の洗い直し等の作業を行ったうえで、相互にそれぞれの研究方針を照合・検討し、内外の必要な情報収集計画等を打ち合わせた。それをもとに、各自がそれぞれの領域で、テキストの読解を中心に研究を遂行した。

研究代表者は、PC を用いて内外研究ネットワークの構築を進めたほか、ヘブライ・ギリシア・アラム語等に対応させ、資料のスキ

ャニング・電子文字化を行い、DVD-ROM に焼き付けて高精度の検索を可能化した。

また、欧米の研究論文・図書等をコピー、スキャニングし送ってもらうだけでなく、申請者の所有する貴重な研究資料・図書等は、スキャニングして HP などに公開し、全世界に発信可能とした。その為に、国内外においてコンピューターに精通する資料収集整理にあたる人材を確保し、また、そうした情報を一括管理するサーバーの導入を進めた。

図書は、ヘブライ思想関係の他、現代の自由論にかかわる倫理学関連図書、及び法論に関わる社会科学関連図書について整備を進め、分担者にあっても、古代ギリシア関係図書、ヘーゲル法哲学関連図書、現代倫理学関連図書の整備を進めた。

2) 本研究では、必要な研究資料、及び情報交換すべき研究者達を求めて、北海道大学から琉球大学まで、とりわけ東北大学、京都大学、熊本大学等々に赴き、また海外ではドイツ、イスラエルを中心に、イギリス、フランス、オーストリア、アメリカ、オーストラリア等々の諸大学との交流を図った。

代表者は、ドイツ留学、ポツダム、ウィーン、エルサレム等での在外研修や客員教授の経験、99 年度からの特定領域研究、及び欧米の出版社からの 3 冊の著書の出版等をベースに築いた学术交流のネットワークをもとに、定期的に欧米の大学に学术交流・資料収集の出張を行い、学会発表等を積み重ねた。

4. 研究成果

(1) ギリシアとヘブライの思想を原典に遡って比較思想的視野から検討した成果として、研究代表者関根は、著書 2 冊、論文 3 本を発表、口頭発表・講演 4 本を担当し、ヘブライズムの倫理と現代の諸問題について考察を進めた。特にリュブリアナでの国際旧約

学会の招待講演は、日本人としては 21 年ぶりだったので内外の注目を集めた。世界的に混迷をきわめる倫理・宗教の問題に、西田幾多郎のキリスト教・仏教に通底するものの視座などに基づく提言をし、講演後の質疑応答や感想を総合すると、一定のインパクトは与え得たように思う。その講演を巻頭に置いた拙著『旧約聖書と哲学 現代の問いのなかの一神教』も、書評誌『本のひろば』の昨年度の成果を選ぶアンケートで 5 人の選者から推薦され、単著としては最高得票で、これまた一定の評価を得ている。内容的には特に、次の諸点が一番の成果だった。すなわち、古代ヘブライズムの倫理が、生の贈与性と死の罪責性について語ることに注目したこと、そこから、近現代の思潮がコギト的主体の前進にばかり価値を置いてきたことに対してバランスシートをつきつけ反省を強いる語りを始めたこと、その点について他の分野との切磋琢磨のなかで学問的なレベルで語り出す端緒を得たことなどである。

(2) 研究分担者三嶋は、ギリシア思想研究を更に進め、共著 1 冊、執筆論文 2 本、口頭発表 2 回を行った。また講演会の通訳および翻訳を務めた。その主たる内容は、アンティステネス、アリストIPPUS など小ソクラテス学派の思想の研究と、ソクラテス、プラトン、アリストテレスにおける徳育のアポリア、また古代ギリシア哲学の現代的意味についての考究である。またダブリンにおける国際プラトン学会(2007)およびソウルにおける国際哲学会(2008)に参加するとともに、スイス、イタリアで資料収集を行った。

(3) 研究分担者下城は、共著 2 冊、論文 3 本を発表して、ヘーゲル・ヘルダーリンによるギリシア・ヘブライ思想理解、及び現代倫理学における自由論について検討した。

青年ヘーゲルの論文「イエスの生涯」「キリスト教の精神とその運命」は、自死に向かうエンペドクレスを描いたヘルダーリンの『エンペドクレス』に触発されたヘーゲルが、歴史における絶対者の没落の必然性を検討したものである。同時期ヘーゲルは、カントのニュートン万有引力をモデルとした超越論的道德法則観・定言命法と対質しつつ、古代の真理が近代において変質せざるを得ないことを見出し、『法哲学』に連なる、古代と近代の世界観の違いを視野に入れた、人間並びに絶対者の自由と倫理と法を巡る思想を展開した。

それらの検討をもとに、西欧思想史・倫理学上の「法」概念が、() 万物のアルケーとしての法、() ソクラテスが従うべきとした人間が定める国法、() 人格神により与えられる法、() 社会・歴史の規理性、() アトミズム的要素を規定する機械論的因果法則、並びに反アトミズム的法則、() 科学的法則観を目指して制定される近代市民社会的法、に下位区分されるべきことを検討した。

以上を踏まえ、加えて、近代の因果論的法則観の限界に露呈している環境倫理的諸問題、並びに因果論的法則観では説明しきれない身体論的認知哲学、生態学的倫理学等を検討し、従来の認識論的枠組みにおさまりきれない科学法則(法) と人間の自由意志(倫理) の矛盾問題について解明した。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

関根清三：「イサク献供物語の哲学的解釈」、『旧約学雑誌』4 号、日本旧約学会、2007 年 10 月、19-55 頁

関根清三：「モラルの再生に向けて」、青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部編『モラル教育の再構築を目指して モラルの危機とキリスト教』教文館、2008年3月、15-43頁

関根清三：「老いと死をめぐって」、『アスペン・フェロー』17号、2008年8月、9-13頁

三嶋輝夫：

「古代ギリシアにおける徳育のアポリア」
前掲、『モラル教育の再構築を目指して』教文館、143-161、

「レオ・シュトラウスのソクラテス解釈」
雑誌『思想』No.1014、2008、129-140。

下城 一「ヘーゲルの『法哲学』 その成立の背景(1)」、横浜国立大学教育人間科学部紀要 No.9、2007.2、1~29頁

下城 一「ヘーゲルの『法哲学』 その成立の背景(2)：「イエスの生涯」」、横浜国立大学教育人間科学部紀要 No.10、2008.2、45~70頁

下城 一「身体論のためのメモランダ」、横浜国立大学教育人間科学部紀要 No.11、2009.2、1~13頁

〔学会発表〕(計6件)

関根清三：「イサク献供物語の哲学的解釈」
(2007年5月16日、日本旧約学会)

関根清三：Philosophical Interpretations of the Sacrifice of Isaac(2007年7月18日、スロヴェニア・リュブリアナ国際旧約学会)

関根清三：XIXth Congress of IOSOT in Ljubljana 2007 報告(2007年10月22日、日本旧約学会)

関根清三：「キリスト教学校におけるモラル教育 その基礎の哲学から考え直すと」
(2008年10月4日、青山学院大学宗教委員研修会)

三嶋輝夫：「時代と時代を超えるもの」
(2008年3月20日、第一回ICU哲学会)

三嶋輝夫：「自由と規律 - 古代ギリシアにおける父親の権威と役割を中心に」

(2008年6月28日、実存思想協会第24回大会、シンポジウム「実存と教育」、2009年6月刊行予定)

〔図書〕(計5件)

関根清三：『応用倫理学事典』丸善株式会社、2007年(共編著)、990頁。

関根清三：『旧約聖書と哲学 現代の問いの中の一神教』、岩波書店、2008年(単著)、299+xxvii頁。

三嶋輝夫：『哲学の歴史 1』、中央公論新社、2008年(共著)、364~409頁。

下城 一：『環境教育』、共立出版、2007年(共著)、21~25頁、79~84頁。

下城 一：『身体とアイデンティティ・トラブル』、明石書店、2008年(共著)、179~200頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関根 清三 (SEKINE SEIZO)
東京大学・大学院人文社会系研究科 教授
研究者番号：90179341

(2) 研究分担者

三嶋 輝夫 (MISHIMA TERUO)
青山学院大学文学部 教授
研究者番号：80157479

下城 一 (SHIMOJO HAJIME)

横浜国立大学教育人間科学部 教授
研究者番号：20345466

(3) 連携研究者

なし